

名城大学 F D 委員会

# Meijo FD NEWS

Meijo University Faculty Development News

Vol.5

2006.2

同僚から学ぶ  
授業改革

- ◆ 第3回【授業参観／同僚に学ぶ】レポート＜PICK UP VOICE、紙上検討会＞
- ◆ マークリーダーを用いた「学生による授業改善アンケート」集計システム操作説明会を開催！
- ◆ 時の語り部Vol.3

# Program 【授業参観／同僚に学ぶ】

第3回

今回で3回目を迎えた【授業参観／同僚に学ぶ】は教員相互が授業の方法を学び合い、一人ひとりの授業の力量を高めるためのプログラムです。

名城大学では平成15年度後期からこのプログラムを始め、平成16年度、本年度と継続的に進めてまいり、今回は、2つの新しい試みを行いました。まず1つ目は「同僚から学ぶだけではなく、同僚に聞いてみよう」という新しいコンセプトを打ち立てました。この新しいコンセプトは「授業を参観していただいた先生方にアドバイスコメントをいただき、自分の授業を改善したい!」という先生方の授業の力量を高めてもらおうというコンセプトです。

2つ目は先生方の授業のセールスポイントを中心に可視化したデータとして蓄積、共有するために、ビデオ収録を行いました。今回は全21回のプログラムで延べ87名の教職員に参加いただきました。全授業公開プログラム終了後に、授業担当者及び授業参観者を囲んでフリートークによる授業検討会を実施し、授業改善のためのアイデア等を教員間で共有する機会をもちました。実際に今回の授業検討会では、多くの先生方が抱える共通の問題（私語、居眠り、遅刻、欠席等）が浮き彫りになり、授業を改善するには環境作りも大切であることなどが議論されました。

【授業参観／同僚に学ぶ】を進めていく中で、教育職員、事務職員、学生が一体となって授業を創り上げていくことが大切かと思ひます。

## ■ 参観者内訳 (延べ数)

### □ 職員 (43名) の内訳

FD委員 10名  
FD委員以外 33名

職員 43名  
教員 44名

### □ 教員 (44名) の内訳

FD委員 31名  
FD委員以外 13名



## ■ 第3回【授業参観／同僚に学ぶ】プログラム参加状況

| 連番 | 日付        | 時限 | 開講学部   | 教員名    | 授業科目名     | 履修者数 | 教員参観者数 | 職員参観者数 |
|----|-----------|----|--------|--------|-----------|------|--------|--------|
| 1  | 11月14日(月) | 2  | 都市情報学部 | 大野 栄治  | 土地利用計画論   | 90   | 2      | 3      |
| 2  | 11月14日(月) | 3  | 法学部    | 伊川 正樹  | 租税法       | 460  | 4      | 2      |
| 3  | 11月15日(火) | 1  | 農学部    | 原 彰    | 基礎生物化学    | 115  | 10     | 3      |
| 4  | 11月15日(火) | 2  | 人間学部   | 稲垣 行一郎 | 心理学       | 380  | 2      | 2      |
| 5  | 11月16日(水) | 2  | 法学部    | 伊川 正樹  | 租税法       | 460  | 1      | 1      |
| 6  | 11月16日(水) | 2  | 理工学部   | 板橋 一雄  | 地盤力学Ⅱ     | 80   | 2      | 3      |
| 7  | 11月16日(水) | 5  | 人間学部   | 稲垣 行一郎 | 芸術文化論     | 200  | 3      | 3      |
| 8  | 11月17日(木) | 1  | 法学部    | 柳 勝司   | 民法Ⅰ       | 510  | 4      | 3      |
| 9  | 11月17日(木) | 2  | 法学部    | 藤田 衆   | 外国文学      | 100  | 1      | 2      |
| 10 | 11月18日(金) | 1  | 法学部    | 藤田 衆   | 外国文学      | 100  | 2      | 1      |
| 11 | 11月18日(金) | 1  | 理工学部   | 板橋 一雄  | 地盤力学Ⅱ     | 80   | 1      | 1      |
| 12 | 11月18日(金) | 1  | 理工学部   | 山ノ井 基臣 | 制御工学Ⅲ     | 115  | 1      | 3      |
| 13 | 11月18日(金) | 1  | 農学部    | 小原 章裕  | 食品化学Ⅱ     | 110  | 1      | 2      |
| 14 | 11月18日(金) | 1  | 薬学部    | 西田 幹夫  | 社会薬学      | 110  | 0      | 1      |
| 15 | 11月18日(金) | 2  | 法学部    | 柳 勝司   | 民法Ⅰ       | 510  | 0      | 1      |
| 16 | 11月18日(金) | 2  | 薬学部    | 西田 幹夫  | 社会薬学      | 120  | 1      | 2      |
| 17 | 11月18日(金) | 2  | 都市情報学部 | 大野 栄治  | コンピュータ演習Ⅱ | 40   | 1      | 1      |
| 18 | 11月21日(月) | 3  | 法学部    | 伊川 正樹  | 租税法       | 460  | 2      | 2      |
| 19 | 11月21日(月) | 3  | 教職課程   | 平山 勉   | 教育方法論     | 21   | 4      | 3      |
| 20 | 11月21日(月) | 5  | 教職課程   | 平山 勉   | 教育情報論     | 74   | 1      | 2      |
| 21 | 11月24日(木) | 2  | 経済学部   | 勝浦 正樹  | 応用経済データ分析 | 30   | 1      | 2      |

大野 栄治  
教授

OHNO Eiji

開講学部……都市情報学部 | 授業科目名……「土地利用計画論」

### 授業の 概要と目的

前期には、土地利用計画の基礎知識として、計画の妥当性を評価するための費用便益分析および各種便益評価法（ヘドニック価格法、仮想市場評価法、コンジョイント分析など）の理論を解説し、適用事例を紹介する。後期には、狭義の土地利用計画のみならず、広義の土地利用計画（緑地・公園計画、都市環境計画、都市防災計画、市街地開発計画、都市再開発計画）も取り上げ、それらの考え方や仕組みなどを解説する。

## 板書からパワーポイントへの切り替え

御多分に洩れず、私の講義でも板書からパワーポイントへ切り替えました。これは、特に学生の利便性を考慮したわけではなく、私の研究スタイルが何年前にも「紙と鉛筆」から「モニターとキーボード」に切り替わっていたので、研究会や講演会のプレゼン資料を講義に流用するのに便利だったという理由からです。なお、講義資料の大部分は書き下ろしであり、流用しているのは一部であることを断っておきます。しかし、この「流用」という行為が講義に思わぬ効果を発揮することになりました。

第1に、学会等の研究会の資料では、新規研究の独創性を強調するために既存研究の不完全性を解説しています。これには「君たちの進歩は現状に疑問を持つことから始まる!」というメッセージを込めていますが、講義終了後に学生が質問に来るようになりました。

第2に、一般向けの講演会の資料では、学問の社会的役割を理解してもらうために身近な社会問題と当該学問との結びつきを解説しています。その際、例えば「この現象は現実社会のどこに生じているか?」などの質問を学生に投げかけます。年度半ばまでは指名しないと答えてくれませんでした。年度終盤には自発的に手が挙がるようになりました。

第3に、現実社会との接触を紹介するうちに、余談に花が咲いてしまうこともあります。しかし、余談になると学生の目がパッチリして、リフレッシュ効果があります。

以上の効果は講義の準備段階で意図したものではありませんでしたが、分かりやすい講義を目指して講義資料を準備していることになり、私の努力と工夫として認めていただければ幸いです。

伊川 正樹  
講師

IGAWA Masaki

開講学部……法学部 | 授業科目名……「租税法」

### 授業の 概要と目的

「難しい」「数字は苦手」と敬遠されがちな租税法。しかし、実はあなたの身の回りに多くの税金問題が潜んでいます。事例を通じて税金を法的にとらえ、社会に対する関心を高めることを目的とします。

## パワーポイントを用いた双方向型授業

法律の学習は、机上で知識を身につけ実例を検討することが中心だが、複雑な法理論を理解することは容易ではない。そこで視覚に訴える教育方法の導入が有効である。また、教師から与えられる情報を一方的に受け入れるだけでなく、それに基づき自ら考える作業によって、インプットした知識を根付かせることができる。こうした方針に基づき、パワーポイントを活用して内容を理解させた上で、問題を提示し、自分ならどう考えるかを検討させている。板書を行わない分、授業進度は速くなるが、他面、ノートを取る学生のスピードを考慮しなければならないので、書き込み式のレジメを配付した上で、画面に表示する内容を絞り、詳細は教科書や配付資料を参照するように指示している。また科目の性質上、「〇〇税について考えよ」との課題を出しても「税金は払いたくない」という一般的な意見にとどまることは自明である。そのため、一定の知識を

身に付けさせなければならず、しかも効率的に行わなければ課題の検討に費やす時間はない。したがって、説明する範囲と自習させる内容とを吟味する必要がある。講義で取り上げすぎると、自習する意欲を失うとともに何が重要なのかを見失うのが最近の学生の傾向である。そこで、各講義の最後にはその日の内容のポイントを示し、次回には前回の復習を行っている。講義への学生参加については、学生との間で議論するのが理想であるが、学生の理解度や予習の程度、受講人数を前提とすれば実現は困難である。しかし代替策として、簡単な質問をし、数人に答えさせるとか自分の意見に近いものに挙手させるなどの方法が可能であり実践している。また、教室内で発言することに抵抗のある学生に配慮して、電子メールでも質問を受け付けている。基本的な内容が多いが、踏み込んだ質問をする学生もあり、一定の成果を挙げている。

原 彰  
教授

HARA Akira

開講学部…… 農学部

授業科目名……「基礎生物化学」

### 授業の 概要と目的

生物化学は、生体成分ならびに生物体におけるさまざまな反応について、主に化学的な見地から研究し、生命現象を解明しようとするものである。基礎生物化学では、生物体を構成し生命活動に重要な役割を果たしている糖質、タンパク質、脂質、核酸などの構造、性質および機能を取り扱う。

### 特別な工夫はないが静かな授業

私の授業は取り立てて特別の工夫をしているわけではありません。後期は3科目の授業を受け持っていますが、どの授業でも最初に「おはようございます」から始めます。学生の返事が少ないと、もう一度やり直します（この効能は、授業以外で出会った学生が挨拶してくれることです）。それから、飲み物、食べ物をしまうこと、帽子を脱ぐことを伝えて講義を始めます。

該当の講義は教科書を使わずに、プリント、口述および板書で行っています。スクリーンは使用しません。スクリーンに映したものを学生に書き取らせるには時間がかかりますので、必要な図はプリントで渡します。口述による筆記は、学生の集中力を高める効果と漢字やテクニカルタームの確認、および知ってもらいたい最小限の知識を理解してもらうために、大いに役に立つと思っています。まず、当日の講義のポイントをキーワード程度で板書します。その日は、1枚のプリント

をもとにタンパク質の機能について講義をしました。プリントには、機能についての説明が書いてあるのですが、その説明にさらに注釈をつけています。たとえば、酵素のところでは、私の研究した2種類の酵素について説明しましたが、一つの酵素は、米国のロックフェラー大学での仕事でした。大学の前身はロックフェラー医学研究所であり、野口英世が在籍しており、野口英世の胸像が図書館にあること、カフェテリアには実験中の大きな写真が飾ってあることなどを交えて講義を進めました。なお授業を聞いてくれた先生方から、「驚くほど静かである、静か過ぎて逆に気になる」という感想がありました。私は授業が騒がしいのは教員の責任であると思っています。

受講者は100名程度であり、カードリーダーで出席をとっています。授業は出席をとるべきであるというの信念としてもっています。

稲垣 行一郎  
教授

INAGAKI Kouichiro

開講学部…… 人間学部

授業科目名……「心理学」

### 授業の 概要と目的

私たちは文明の発達とともに「自己を統制する」ようになり、コミュニケーションの本音と表現が一致なくなりました。お互いに複雑なメッセージを送ってコミュニケーションを困難にしています。授業では自己理解を深めるため、心理テスト（TEG）を行って自己分析をし、自分の性格や人間関係の問題、コミュニケーション特性を交流分析の理論を研究しながら学習する。

### 受講生の多い（約400名）授業運営の試み

400人の学生を興味を持たせて、授業運営するというのは、数多くの問題を含んでいる。問題のひとつは一方通行の講義となる。学生の興味を持たせる方法として電子掲示板を使用して授業を進める試みを実験的に採用した。学生が携帯電話を使用しメールのやりとりを授業中見かけた。この状況を授業に反映できないかと考え、授業運営に取り入れることを実験的に試みた。まず講義を進め、中断して今までの講義についての質問、あるいは理解できない、興味のあること等を携帯電話メールで掲示板に掲載する。スクリーンにどんなことをそれぞれが考えているか、学生同志がそれを見て理解できる。特に問題のある箇所は、スクリーンを通して解説を進めていく。1回の授業の中で2回、あるいは3回繰り返し、学生の理解を確めながら進むことによって通常の学生40名と同じような授

業効果が得られることがわかった。また最後に今日の授業についての学生の感想を掲示板に掲載して、来週の授業の予習に役立たせている。今後の課題として、いかにバーバルコミュニケーションを活性化していくか、効果の測定を課題として考えている。

板橋 一雄  
教授

ITABASHI Kazuo

開講学部…… 理工学部

授業科目名…… 「地盤力学Ⅱ」

授業の  
概要と目的

土木という言葉が「築土構木」から生まれたように、土を築くところから土木（建設システム）が始まります。土木構造物は土を利用したり、地盤に基礎を置いています。代表的な公共構造物には、橋梁、ダム、トンネル、道路・鉄道、港湾・空港、上下水道などがありますが、これらの調査・計画・設計・施工・維持・管理のすべての段階において、土や地盤の性質に関する確かな知識が必要となります。

## 幅広い勉学意欲の学生を対象として…

建設システム工学科では、学科独自のシラバスを作成しています。それには、各授業科目の到達目標が6項目まで記載できるようになっており、学期初めに配付しています。各回の授業の初めには、前回の授業内容の復習と今日の授業の到達目標を話すようにしています。授業では、教科書をまとめたパワーポイントを使用していますが、紙に出力したものを全員に事前に配付しており、予習も可能にしてあります（なかなか予習はしてくれませんが）。授業では憶えるべき事項、憶え方、ものの考え方を中心に話しています。私語に対してはきつく叱りますので、非常に静かに授業を聞いてくれます。しかし、40分もすると寝始める学生も出てきますので、B5程度の用紙を配り小テストあるいはまとめをやらせます。これが出席カードにもなります。また、各学生が内容の理解不足の点や質問を記載することによって、個別に指導することもできます。各回の授業内容の理解をより深めるために、ほぼ毎回宿題を出し

ています。2～3日後に宿題ノート（顔写真付き、1年間使用）で提出させています。宿題ノートは次回の授業までに見て、コメントを書き込み返却しています（コメントはなるべく褒めるようにしています）。多くの学生が理解不足の場合には、次回の授業の時に解説を追加することになっています。建設システム工学科では、半期授業ごとに「学習到達目標の達成度と授業評価に関する調査」というアンケート調査を実施しています。シラバスに記載されている到達目標の達成の程度と授業に対する学習姿勢を学生自身が自己評価を行ってもらいます。また、授業の方法や進め方に対する評価と意見をうかがって、学生自身の勉学意欲の向上と教員の授業改善に活かすようにしています。ちなみに今回の公開した地盤力学Ⅱでは、学生による総合評価は8点以上（9点満点）をいただいています。「分かり易かった」「勉強環境が整っていた」「授業の進め方がよい」「二年次の中で一番わかり易い」などの意見をいただいています。

柳 勝司  
教授

YANAGI Katsuji

開講学部…… 法学部

授業科目名…… 「民法Ⅰ」

授業の  
概要と目的

民法第一編総則（第1条～第174条の2）についての授業である。授業においては、まず制度の基本概念を示し、その制度の趣旨を説明する。つぎに、その制度を利用するための要件を明らかにし、最後に、その制度を適用した場合の効果について述べる。

## 大教室における授業

民法Ⅰの授業は、大教室で行われている。受講登録者は510名で、実際に受講している学生は、350名から300名程度である。大教室であるので、隅々まで声が届くように、マイクのボリュームは高めに設定している。分かり易い授業をするために、かなり詳しいレジメを予め配付している。予習をできるようにと、1回前の授業で配付している。レジメには、所々に空欄があり、その空欄を埋めながら授業を聴いてもらうことになる。今年度は特に目立つのであるが、レジメだけ受け取り、教室を出て行く学生がいる。「レジメはかなり詳しいが、講義は聞かずにレジメを見ただけで民法を理解できる能力は、失礼かもしれないが、みんなには無いと思う」と、私は叫ぶのであるが、平気でレジメを持ち逃げする学生が後を絶たない。また、たびたび注意をするのであるが、私語はなかなか無くならない。私語をするのは、教室全体で

はなく、極限られた学生達である。注意されても、自分が私語をしていることに気がつかない（振りをする）学生もいる。授業に出ても、最初から寝ている学生、携帯電話のメールで遊んでいる学生、などなど。大教室で授業をしていると、本当に色々な学生が目にはいる。しかし、大半の学生は、真面目に授業を聴いている。特に、前の方に座って授業を聴いている学生は、本当に熱心に学んでいる。そのような学生は、授業の終わった後などに、質問をよくする。その質問の内容はかなり高度である場合もあり、学生は大きな進歩をしているということが分かり、教員として嬉しく思うことも多い。大教室で授業をしていると、学生の一人ひとりと話をしたり、意思を交わすということは、殆ど不可能である。それでも、「何人かの学生はこの授業を熱心に聴いてくれるはずだ」と信じ、それを支えにして、教員（私）は授業をしている。

藤田 衆  
教授

FUJITA Shu

開講学部…… 法学部

授業科目名…… 「外国文学」

### 授業の 概要と目的

今年度はフランス最大の作家であるバルザックの代表的作品を取り上げることで19世紀前半のフランス社会を蘇らせてみたい。この時代は近代資本主義のもとが形成されていく時代で、現状に繋がる多くの問題が立ち上がってくる。それらを検証していくことでそのような問題にどのように対処していくべきか一つのヒントが得られるかも知れない。

## 長い目で見える必要

授業参観された方々からはいろいろなご意見をいただいた。非常に好意的な意見をいただいた方もあるがそれは恐らく最初から文学に興味を持っていたりしやる方だったと思われるので少し割り引いて考えなければいけないだろう。厳しい意見を出された方は理系の先生だったと思われるので、文系の教養の授業の意味が十分わかっていないと思われるからこれも割り引いて考える必要がある。私の思うに、このような授業参観の最大の意義はそれをやったこと自体にある。

まずこのような試みがなければ他の先生方がどのようなことをしているかがわからず、したがって学生たちがどのような勉学をしているのか分からない。また教室のうしろから授業を見ることによって学生の立場から、どのようなことが分かりやすく、また分かりにくいのか

という判断ができやすくなる。そこで分かることはそれぞれの先生によって違うし、簡単に方法論化してしまうことはできない。それで簡単に授業を改良することができるわけでもない。まして軽々に他人の授業を断罪するような態度は論外である。とりあえずこのような試みをしたことで満足すべきであって、それがどのような結果を生むかということは長い目で見える必要があるだろう。

山ノ井 基臣  
助教授

YAMANOI Motoomi

開講学部…… 理工学部

授業科目名…… 「制御工学Ⅲ」

### 授業の 概要と目的

デジタルシステムでは、制御に限らず情報処理を含む広い領域で離散系の数学が必要となってきた。この授業ではアナログにおける微分方程式に対応する、差分方程式の解説と簡単なシステムへの応用、Z変換を用いた解法を考察する。制御のみならずデジタルフィルターなど情報処理への応用も考察し、シミュレーションで確認しながらわかりやすい授業をめざす。

## 実感的でわかりやすい双方向授業をめざして

教師の一方的講義では、学生はノートをとるだけであり、後で同じことを聞いてもほとんど答えられない。このため学生の頭を活性化させるため次のような双方向授業を行っている。

講義中、黒板にて計算を行うが、時々途中の計算を学生に行わせる。学生が計算作業を行っている間、私は教室を巡回する。しばらくして、回答に達しそうな学生(2~4名)に、黒板にて計算と説明を行わせ、質問を受け、それに答えさせる。このように、その問題について各学生に問題意識を持たせた後、再度私が説明の補充を行う、といった講義と演習をミックスした授業を毎回行っている。あまり進まないが学生の理解を第一にしている。

事柄の基本や考え方を良く理解できれば、あとは自分でやれる。従って、残った部分は宿題(レポート)にまわす。このレポート課題は授業中での計算の続行、その授業

ですますべき別の事項の計算とそれに関するシミュレーションなどである。この問題に対する私の計算やシミュレーションを次回の授業で配付し、再度簡単に解説も行い、質問を促している。

制御工学では数式が多く用いられ実感性が見失われがちなので、授業でその事項に取りかかる時はいつも、具体的な装置について学生に問いかける。例えば、「制御量を一定に保つための自動装置の具体例をあげよ。またその動作原理を説明せよ」。トイレの自動給水停止、空調機の自動温度制御などを念頭において質問しているのだが、始めてこのような質問をした時には回答率はかなり低い。しかしこれは制御を実感させる重要事項であるので、後日機会あるごとに繰り返し同じ質問を行っている。すると、回答率は段々と上昇してくる。学生たちの制御に対する習熟度が上がってきたことを実感する喜びの一瞬である。

小原 章裕  
助教授

OHARA Akihiro

開講学部……農学部

授業科目名……「食品化学Ⅱ」

### 授業の 概要と目的

食品化学Ⅰでは、栄養成分を中心に講義を進めたが、本科目では食品の個性を決める第2次機能成分(嗜好成分)について紹介する。さらに、食品は多くの成分が混在している為に、貯蔵や加工処理中にそれら成分がお互いに反応して新しい生成物が生じ、これら反応は食品の品質を高める場合もあるが劣化の要因となる場合もしばしばある。食品加工の立場からこれら反応についても詳しく解説を加えていくことにしている。

## 授業内容を明らかにそして授業運営の問題点と理解度をチェック

担当科目が実際の生活に密着している食品成分の科学に関する内容であるので、具体的な例をあげて学生が理解しやすいように心がけている。実際の授業に当たっては、毎学期最初の授業をオリエンテーションにあてている。授業の目的やそれぞれの時間毎(暦で表示)の授業内容・資料配布予定、参考書や受講に際しての注意事項などシラバスを提示し、この授業を受けるべきかどうかの情報を提供すると同時に受講する場合の心構えをしっかりと意識させている。

授業においては、後部に座る学生が多いのが常であるので、最後部の扉側から指名して質問に答えさせるようにしている。本方式を実施してから教室の前部2/3くらいに多くの学生が着席するようになった。また、授業の最後にミニッツカードによって授業の総合評価と理解度・興味度・難易度さらにはこの授業のための予習・

復習時間をデータとしてとっている。これらデータを基に毎回の授業の改善点を模索している。また、その日の授業内容に関する問題(5者択一問題)を出題し、問題の正解を1回3点として正解数(最高は講義回数×3点)のポイントを平常点とし、残りの61点満点分の定期試験の結果と総合して評価している。これらミニッツカードの集計や採点には大学に設置されているマークカードリーダーが大いに役立っている。ミニッツカードの最後に設定している自由記述欄には、毎回の授業に関する質問や授業における問題点など(喋るのが速すぎたとか板書が見づかったなど)を合わせて書かせている。当方で思い当たる指摘に関しては次の回から改善を心がけることを明らかにし、質問事項についてもできるだけ次の時間の初めに解説を加えるようにしている。これら試みを実施してから、学期末の不合格者の数が以前に比べて半減した。

西田 幹夫  
教授

NISHIDA Mikio

開講学部……薬学部

授業科目名……「社会薬学」

### 授業の 概要と目的

薬剤師は、社会で何ができるのか、薬剤師は何をしなければならないのか、常識的な基礎の段階から多方面にわたって紹介する。本講の目的は、薬学への道を歩み始めた初期の段階で、薬剤師が係わり得る社会活動について、異なった角度からの認識を持ってもらうこと。

## 患者さんとのコミュニケーションスキル:薬局薬剤師のロールプレイ

授業の到達目標:薬学部とはいえ、学生全員が薬学とは何か、薬剤師とはいかなる職業か、明確なイメージを抱いているわけではない。一年生に薬剤師の社会的な存在意義と必要な知識・技能は何かを概観してもらい、高い職業意識を培ってもらうこと。

授業の工夫点:①社会の実態を観て、経験するために、「外へ出よう」と呼びかけている。近郊で開催される学会、研究会などの催しを紹介して、参加報告レポートの提出を成績に加味している。②教室の授業が単なる座学にならないように、外部からの講師を招き、リアルタイムで外気に触れられるように心掛けている。その際の私の役目は、必ず全時間陪席し、授業の進捗状況を掌握し、講師の話がテキストのどの部分に関連しているかを必ず解説する。

公開授業:この度の公開授業は、日程上たまたま現役の薬局薬剤師による“お客様との対話のコツ”

をロールプレイで体験する日となった。このテーマは以前に、テキスト中のコミュニケーションの実際の項を自学自習した際「むずかしい」「これから勉強しなければ」との声が圧倒的に多くあったから取り入れた項目である。クラス100名を無作為に2人一組のペアとして、用意されたシナリオを用いて、店員薬剤師役と市民患者役を交互に繰り返した(解説前の相互学習と呼ぶ)。その体験を踏まえて、薬剤師から、対話の留意点を解説してもらい、再び同じシナリオで訓練を繰り返して、要点の体得に努めた(解説後の相互学習)。

同時に実施したアンケート調査の結果:受講者の授業に対する満足度は100点換算で84.5点。解説前の相互学習と解説後の相互学習では、4点満点評価で3.0から3.6に上昇していた。参観の方々には授業の性格上、担当教員個人の教授能力を評かるものではなく、予想外であったかもしれない。

大野 栄治  
教授

OHNO Eiji

開講学部…… 都市情報学部 | 授業科目名…… 「コンピュータ演習Ⅱ」

### 授業の 概要と目的

ネットワーク(インターネット、LAN)コンピュータの基本OSであるLinux (UNIX) の基本構造と基本操作方法を演習する。これにより、ネットワークサービス(ホームページ検索、電子メールなど)を提供する基幹OS(仕組み)を理解する。また、ソフトウェアを作成するためのプログラミング技法を、C言語を用いて演習する。これにより、Excelなどのアプリケーションソフトウェアの基本原則を理解する。

### 習うより慣れろ

この科目は必修であり、少人数教育を徹底しています。まず、1クラスの学生数が40人程度となるように、6クラスが編成されます。次に、各クラスに2人の教員が配置されます。なお、クラスあるいは時期によっては、1人のTA(ティーチング・アシスタント)が配置される場合もあります。また、この科目を担当する教員は8人ですが、どのクラスの学生も同じ授業を受けられるように、若手の教員が全クラスのスケジュール(授業内容、演習課題、試験問題、成績判定など)を管理しています。そして、90分の授業時間を説明15分と演習75分に振り分け、『習うより慣れろ』を実践しています。さらに、大野担当の2クラスにおいては、『演習中に分からないことが生じたら、直ぐに先生に聞くのではなく、まず隣人に聞きなさい』と指導しています。これは2人の教員では40人の学生の面倒を見切れないという事情によるものです。

が、教える学生にとっては自分の知識を確認することになり、学生にもメリットがあるように見受けられます。しかし、少人数教育のサービスを提供する側の立場としては、スタッフ不足を解消することは不可欠であり、大学当局に対してTA予算の拡充を切に望みます。

平山 勉  
助教授

HIRAYAMA Tsutomu

開講学部…… 教職課程 | 授業科目名…… 「教育方法論」

### 授業の 概要と目的

身近な自己教育・相互教育の実践的な事例を通して「教育方法」の論理を考察することを課題とし、教育実践における個別・具体的な事象に対する教師の「構え」とそれにかかわる「授業」を創造、改善していくプロセスを体得する。

### 学生自身がネットワーク環境を活用し、自ら学習意欲を喚起することを目指して

この教育方法論は、教職必修科目です。今年度は、当初月曜4限で100名を超える受講生の予定でしたが、本務学部の開講科目の関係で、急遽、設定した科目です。そのため、予定外の少人数となりました。ネットワーク環境を活用し、学生との相互コミュニケーションを工夫しています。授業での課題等は、授業用フォルダに毎回提出してもらっています。それとは別に小課題6つを課し、提出してもらっています。そうした課題を授業時間内の演習時間及び個人でネットワークに接続した時に互いに読み合うことで、学生相互の切磋琢磨、他人の教育観、学週観等を共有することを目指しております。公開授業では、前週からの継続で、授業におけるスキルということで、教師の「焦点化間合い取り・想起」等の発問に関して、現職の授業ビデオ教材を視聴させ、受講生の意見や感想の交流及び小課題1を学生相互に読み合ってもらふことなどが授業の目標でした。授

業の導入として前週の学生の感想を提示させていたが受講学生からのコメント(授業後にフォルダ提出)「ほかの人の先週のビデオをみての感想を聞くことができてよかった。それぞれ着目点が異なっていて一つ一つに考えさせられた。有意義な授業とは生徒とのコミュニケーションをとりながら先生と生徒がお互いに学びあうものだった。」とあり、同じ教材を視聴した他の受講生の意見を聞くことがプラスになることがコメントされていました。また、授業全体に対して小課題6つをフォルダ提出させ、過去の受講生の課題例をフォルダで各自で読むことができるようにしていますが、これに関して「課題1の先輩たちの作品を見て、私よりも深い考え方、深い視点をしていて自分ももっとしっかりしなければと思った。」との感想がありました。さらに、「今日みたいな授業参観の場でもうまく授業が展開できる先生になれるようにしたいです。」というような感想にも励まされます。

平山 勉  
助教授

HIRAYAMA Tsutomu

開講学部…… 教職課程

授業科目名…… 「教育情報論」

授業の  
概要と目的

コンピュータやその周辺機器の技術革新は、インターネットに代表されるネットワーク、通信システムの改革（「IT（情報技術）革命」）をもたらし、マルチメディアに対するニーズも多様化している。本科目は、実際にアプリケーションソフト（主にPhotoshop）を活用してマルチメディア教材の作品を制作する。作品制作を通して学校教育におけるマルチメディア技術の可能性を追究する。

## 学生自身が授業の成果を実感できて、次の授業までの学習意欲につながることを目指して

私は、教育方法学、特に授業研究（主に小学校・中学校）を専門に研究しており、平成15年度の名城大学【授業参観／同僚に学ぶ】では、「マルチメディア演習」を、そして平成16年度は、今回と同じ「教育情報論」を公開させていただきました。この授業は、講義科目ですが、その中で可能な限り、学生自身が所定の課題に自分なりのペースで取り組む演習課題を設定し、授業を進めております。具体的には「受講学生がマルチメディア技術に関する理解を深め、自身の授業設計の中でマルチメディア教材を位置づけて活用できること、さらには、必要に応じて既存の教材の再構成したり、新規に作成できるようにすること」を目標にしております。学生自身が簡単なものでもマルチメディア教材を自作できることが、学校や地域レベルで導入されるマルチメディア教材の選定等における評価する力量育成にもつながると考えております。これらの目標を実現するために、この授業

では、授業を大きく3つのパートに分けています。一つ目が、教師からの話題・情報提供です。二つ目が、学生個々による「演習活動」です。三つ目が、続く6限に設定している「自主的な発展活動」です。公開授業では、マルチメディア教材の草分けとしての「ミミ号の冒険」と「パレンケ」の二つについて、その特性の相違点を受講生の意見を交換させるということを中心に行いました。「ミミ号、パレンケそれぞれいいところがあるので、授業でもいろいろ取り入れつつ、自分自身がかたよった意見にならないようにしたいです。」という受講生のコメントもありました。また「私は、どのような形であれ生徒がしたいと思ったことを生徒自ら学ぶということが重要なことだとビデオを見て改めて感じました。」という受講生の感想もありました。以上、部分引用ですが、学生が授業終了後に前向きになってくれていることが本当に嬉しく励まされます。今後も、より良い授業創造に向かって精進していきます。

勝浦 正樹  
教授

KATSUURA Masaki

開講学部…… 経済学部

授業科目名…… 「応用経済データ分析」

授業の  
概要と目的

本講義の目的は、実際の経済データをいかに分析するかを、パソコンを用いながら実践的に理解することにある。前期の「経済データ分析」で学んだ方法を発展させ、経済分析で最もよく用いられる回帰分析による経済データの分析について学習する。経済理論を実証的に検証する計量経済学への応用を最終的な目的とするが、回帰分析を経済データに適用する際のさまざまなテクニックについて、できるだけ実際に説明する。

## パソコンを利用した経済の講義

「応用経済データ分析」は、タワー75の情報処理教室を使った講義で、履修者は30名である。この講義は、前期に開講されている「経済データ分析」の上級編であり、すべての受講生は、前期の科目を今年、または前年に履修済みである。したがって、受講生は私の講義のやり方に慣れているし、講義で使うパソコンの操作にもかなり習熟しており、こちらの要求（主に練習問題を解くこと）にかなり応えてくれる。講義の流れはだいたい次の通りである。

- ① パワーポイントで内容を説明（スライドを印刷したものは、学生に配布）
- ② パソコンの操作方法を説明しながら一緒に例題を解く
- ③ 練習問題を使った演習
- ④ 結果の解釈の説明

こうした中で、特に意識している点は、以下のような点である。

まずは講義中にいろいろな点で質問を与え、指名した上で、答えてもらう（上の①や④の段階）。内容は経済（学）に関する知識、出力結果の解釈、データの分析のための考え方（例えば少子化の原因は何か、交通事故による死亡者が都道府県別で異なっているのはなぜか等）などである。こ

で指名する際には、学生を見て指名する。つまり、学生の顔と名前は一致している（もちろん、最初のうちはそうはいかないが、できるだけ早い段階で覚えるように努力はしている）。これは、学生に適度な緊張感を与えていると思う。

次に練習問題の作成についてであるが、最も注意している点は、題材をできるだけ身近な、興味の持てるようなデータを選ぶことである。したがって交通事故、犯罪件数、スポーツといった、多少経済から離れた題材も利用する。また、作成の際、学生にとって余計な時間がとられないように、見やすく、計算結果もまとめやすいように、問題の中に解答しやすい表をこちらで用意するように心がけている。

またこの科目は、普段の演習やそれを応用したレポートの評価の比重が高い。そこでレポートに関しては、採点した上で、コメントを書いて返却し、その際に講評をする。そのためにオフィスアワーなどを活用している。

ただし、このようなことが可能となるためには、少人数ということが前提条件となっていることは言うまでもない。講義の準備時間（レポートの採点も含む）も他の科目に比べて長くなるが、その分私もより緊張感をもってこの講義に臨むことができています。

# 同僚に学び、同僚から学ぶ

## 第3回【授業参観／同僚に学ぶ】検討会 採録

平成17年11月28日(月) 15時～17時

天白キャンパス：タワー75(15階)レセプションホールにて

参加人数：19名

授業検討会参加者：原 彰、杉下 潤二、藤田 衆、堀川 新吾、松原 慶子、成塚 重弥、小林 明彦、道山 弘康、市原 茂幸、西田 幹夫、小池 聡、岡本 政之、池田 輝政、塩崎 万里、奥村 公和、只木 徹、大野 栄治、伊川 正樹、山ノ井 基臣

西田(司会者、FD委員会授業参観チーム座長、薬学部)：FD委員会で、授業参観・公開授業チームの責任を担っています薬学部の西田です。

議論の前に、今までの流れを振り返ってみたいと思います。平成15年度後期には授業参観と授業公開で“お互いに学ぼう”というコンセプトで第1回の授業公開参観を実施しました。平成16年度前期にはもう一度継続しようと、小規模ながら行いました。平成17年度後期は、同僚から学ぶだけでなく、授業を公開した先生の中には、他の先生からコメントが欲しい、そこから授業を改善していきたいという人がいるはずだ、という観点から、そのコンセプトが2つ目に加わりました。第3番目のコンセプトとして、授業のポイントを収録してデータとして蓄積し、今後の検討の材料にしていきたい、という意見から授業をビデオに収録しました。このあたりのコンセプトの推移が果たしてうまく機能したかどうか、という点も含めまして今回の授業公開についてご意見をいただきたいと思います。

では、FD委員会副委員長の池田先生に、FDにかける想いというものを伺いたいと思います。



池田(FD副委員長、人間学部)：この【授業参観／同僚に学ぶ】の方法論は、個人の授業の力量を高めるため京都大学あたりから広がりました。名城大学では、一人ひとりの先生方の授業の底上げをはかる方法論の有効性を強く問うような形で展開してきたと思うのです。アメリカのFDでは授業参観で得られた情報を個人の先生にお返しして、

当人がそれに基づいて自分の授業を改善していくというパーソナルサービスが充実されつつあります。

本学でも同僚に学ぶだけでなく、今度は見てもらう先生方から意見をもらって自分自身を改善するという方向に向かっており、【授業参観／同僚に学ぶ】がある程度進化していると感じています。ただし、手法が良い悪いというだけの意見の出し合いではなく、その狙いは、本当に一人ひとりの先生の授業が良くなるという方向で議論をどう深めていくか、これがポイントになると思います。

杉下(FD委員、大学教育開発センター長)：同僚に学ぶ、というのは文字通り同僚に学ぶことによって、人の為でなく自分の授業改善の為に役立てることだと思うのです。生の声をすぐ反映する方法がいいと思います。それをもう一歩進めると、例えば90分授業の内、最後の20分を使って、資料も教材もあるその教室で、学生と学生の反応を見ながら、同僚に学ぶ授業参観のあり方を考えてみたらどうか、と感じました。

西田：個々の授業についての話になるのは否めませんが、できるだけ今後につなげていきたいと思っています。また、学内の他の先生方に、討議の内容について、どう思われますか?という問いかけをしたい、情報提供でできればいいと考えています。

山ノ井(理工学部)：第1回目の【授業参観／同僚に学ぶ】で、拝見した先生(理工学部)は授業のイントロに面白い話をされていました。それ以来、前回の授業がわからなくても学生が誰でも入り込める話から、自然に授業に集中できる雰囲気作りをしよう、と努力するのですが、ついまた「前回何やった?」と言ってしまうんです。学生は、こちらがやる気で授業に臨んでもなかなか乗ってこないし、すぐにやる気にならない。それをこちらに向けてというのは、かなり脚色がいいります。

小林(FD委員、理工学部)：今年のコンセプトのビデオについて、どういう目的で撮影されてい

るのか、よく理解できませんでした。私が参観した原先生(基礎生物化学)の授業はいい意味で講義に適する古典的なスタイルで、また同じく平山先生(教育方法論)はパソコンの前に最先端の機器を使い、全く対照的な授業です。平山先生の授業は、理解をさせながら進めるとの教えろということのスキルという意味では良いと思います。

原(FD委員長、副学長)：授業参観は14回のうちの1回の授業だけを見ているので、いつもはそうではない、ということも理解してください。やはり他の先生方に見ていただくというのは、非常に有意義であると思いますし、またコメントを見ると、評価は人によって様々と改めて感じました。私の授業では最初に必ず「おはようございます!」という挨拶から始まります。そうすると、朝、研究室へ行く途中で会う学生は挨拶するんです。これは、授業で挨拶しているのが効いているのかな、と思っています。それと授業では帽子を取りなさいとか、飲み物は今すぐ飲んでしまいなさいということはきちんとやります。

西田：授業を公開していただいた先生、公開した感想や、公開前後でどう変わったかなど、ご意見ありませんか?

伊川(法学部)：出欠の確認は、私の授業は履修者が460人に対し、教室が300人収容なのでそもそも全員来る事は事務方も想定していないんですね。2年前は出席を取って出席率は良いが、あまり授業を真面目に聴かないという学生がいたので、今年は出席を取るのを止めています。その代わり、試験は講義でしゃべった中から出すと言っています。大教室ではカードリーダーで出席をとると入室して「ピッ」とだけ出て行ってしまふ学生もいると聞いているので、労力を使ってまで出席を取る意味がなくなっています。今回は理系の先生方にも見ていただいて、また違ったところから考えなければいけないと思いました。

市原 (FD委員、農学部) : 文系の何百人という講義の中で、伊川先生の授業で学生はすごく静かに、真面目に聞いているなと思いました。しかし、もう一人の先生は学生が何をしようが自分勝手にしゃべっていたし、板書もめちゃくちゃだし、これが典型的な文系の先生の講義かと思っていました。その点伊川先生は学生を上手に引き込もうと努力されていたと思います。

大野 (都市情報学部) : 私は「いかに学生の興味を惹くか」に注意を払っています。それで、不特定多数の人々を自分の世界に短時間で引き込む話術という意味で、某有名TVショッピングの商品説明がとても参考になっています。ただし、そこはやはり授業ですから、本質を捉えた内容であることは言うまでもないことです。今回コメントを頂き、大変感謝しています。ただ、「ここは良くなかった」という意見を伺いたかったという気持ちがあります。授業を成功させる方法は幾つもありますが、失敗する例には共通点があると思っていますので、私はその地雷を踏んでいないかを心配しています。



西田 : 1回目と2回目の影響が強すぎて、3回目の新たなコンセプトの「他の先生からのコメントが欲しい、それによって授業を改善していってもらう」という意味が上手に伝わらなかったのではないかと心配していたところです。

藤田 (FD委員、法学部) : 授業参観では結果というのは求めてはいけません、と思っています。たぶん授業の1回に過ぎないということもあります。意見として様々なものがありますが、何か感じるものはありますね。方法論としてパワーポイントを使うのは素晴らしいけれど、それだから授業が良いという事ではない。学生との距離感とか説明の仕方とかは教員それぞれであり、全体として捉えて、直さなきゃいけないと思うところがあります。

池田 : アメリカの授業参観法では、個々の悩みを持っている先生に対して、人のアドバイス、ビデオのアドバイス、それぞれ単独でやる場合と組み合わせる場合、ポイントをアドバイスして問題解決するという方向で進化している例があります。個人の先生方の悩みを聞いて、ある程度専門の人が個人的にアドバイスするというのが良いのではないのでしょうか。

西田 : ビデオについては、こうした問題がでてきたときに、記録があれば皆さんで共有できるのではないか、という考えから始めたものです。

松原 (FD委員、経済学部) : 私が困っている点について他の先生がどうやっていらっしゃるか、ということでは、同僚に学ぶということで参考になった点がありました。

堀川 (FD委員、経営学部) : 授業は2つ拝見した内、伊川先生 (租税法) に関しては分野が違

うので、ニュートラルなコメントをつけさせてもらいましたが、授業として近いものだったら参考になったのかなとは思いました。平山先生 (教育情報論) は分野も近かったもので、結局アドバイ的な辛口のコメントを付けたというのが正直な所です。科目によっては、全く関連のない先生でもわかるものもあるのですが、そうでない場合が圧倒的に多いので専門知識を持っている先生に参観していただくのが良いかと思っています。

大野 : 私は専門分野として関連のある先生より、全く関係のない先生に見ていただいて、わかってもらえるかどうかの方に興味があります。大学生と言っても少し前までは高校生で、言ってみれば素人です。そういう学生に授業をする場合、関連のない分野の先生方にわからない授業だったら、学生にもわからないだろうという考えです。

池田 : これに関しては様々な意見がある方が良いというのが答えです。先生方にあえて言いたいのは個に応じた授業が出来ているか、ということです。話さず話して、あとはおまえたちで理解しろ、という古典的な講義観は今ではそうはいかない。そこをどう検証し、どうチャレンジするかということですね。

伊川 : 個別の対応ということだと、教科書の内容の全部は授業では触れないようにしています。ここまで教えたらこういう質問が出てくるだろう、ということに関しては、あえて触れない。学生に質問させようとしています。メールで受け付けています。本当はやりたくないんですけど、点数をあげるような形でやっています。そうすると、私がすぐに答えられないような、鋭いところをついてくる学生もいます。あとは何回かに1回、その日の授業を踏まえて自分がどう感じたかをレポートに書かせて、それをポートフォリオ (学習の過程や成果、あるいは学生自身や教員に対する評価を含めた蓄積のこと) として取っています。

塩崎 (FD委員、人間学部) : どういう授業が良いかというのは基本的には、受講している学生が理解して納得しているかどうか。つまり先生と学生とのコミュニケーションで、それがわかる、わからないということが根本的に問題だと思います。方法については、お互いに納得して理解している、それ以外ないと思います。具体的に何がいいかというのは、授業の内容にもよると思うのです。もうひとつは、FDのことを話すと、学生がどうやって集中できるかとか、何か面白い話題を提供して飽きないようにすると、そういう話題が出ると思うことなのですが、学生が何も努力しないで、飽きないように提供するのは、こちらはエンターテインメントのつもりではありません。名城大学の学生に何をどの程度期待するかということもあります。また、教師の努力以外に、受講者の数が多い、といった努力以外の要因もあります。例えば、私のクラスは40人以上では細かい指導はできないということで、履修者を4クラスにわけてもらっていて、細かい指導ができるし、手間がかけられるし、理解度が把握出来るので、引き続きこの状態でやっていきたいですが、教員数が足りません。私は教育の質を保つ為に今の状態が維持されることを希望しています。

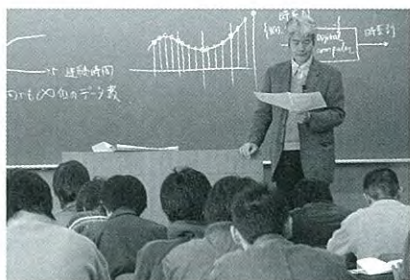
只木 (大学教育開発センター) : どういう学生に育てるか、というコンセプトが学科や先生によって違うと思うのです。その目標によって、科目も授業も変わってくるので、その理念が違う授業を見ると、全く方法論が違うと思います。この授業はどこを目的にしているのか、どうやって評価して

どうなればいいと思っているかということ、先生と学生とのコミュニケーションに授業は大きく関わっていると思うのです。あと、どんなに自分が良いと考えていても学生には伝わらない、自分が良かれと思ってしたことでも自分勝手にやっていることもあるので、他の先生に見ていただいて「それおかしんじゃないの」と言っていたくのはとても重要な機会だと思っています。

道山 (FD委員、農学部) : 授業参観は後ろから見るので、先生が何か言った時の学生の表情の変化を見られなかった。学生の反応による評価ができなかったのが残念です。ただ、確実に授業開始後40分くらいになると、学生の後ろ姿の動きが止まりますね。農学部の学生は40分しか集中力が保たないという印象で、自分の授業では授業開始から40分くらいで休みを入れるように改善の努力をしています。一つの授業の受講生が多すぎるという問題については、こういう事態を大学が放置しておくことが問題だと思います。

奥村 (FD委員、学務センター課長) : 確かにノルマの問題、教室の問題、それらを双方から考えないと解決しないです。平成18年度に向けては天井を設け、人数を抑えようということも考慮しています。ただ、教室の問題が最大の問題となっており、学務センターとしても最大の努力はしたいと考えています。

杉下 : 人数は適正の人数にすべきですが、誰かを雇って補充しない限り1人あたりの授業時間が増えることになるから逆に多人数での授業を望む先生もあるというケースがある。また、検討会のあり方として、例えば私語や遅刻者の問題など、興味を持たせるにはどうしたらいいか、といった先生方が共通して持っている問題を、要するに授業改善研究会のようなそういう方向に持っていく方がいいのではないのでしょうか。



原 : 授業公開をしていただいた先生、参観していただいた先生、ありがとうございました。名城大学では半期で授業科目は1500を越えますが、将来的には一クラスの人数を下げなくてはいけませんと考えています。もう一つ問題として、文系で出席もせず試験を受け、単位を取っている学生がいるという事は非常に問題であると思っています。授業公開以前の問題として、私語、居眠り、遅刻・欠席、途中退席なども含めて、大学全体で解決しなくてはいけません問題は先生方がきちんと注意をしていくことが必要だと思います。学生の授業を受けるマナーが守られていないのは、学生にも先生方にも原因があると思います。授業を公開して、それで簡単に授業が良くなるというのは難しいことですが、こういう形で議論をしないと理解が得られません。それが授業検討会を開いていく上で大変有意義なことであると思います。

※本文は敬称略で掲載しています。また、記録内容は簡潔にまとめてありますことをご承知ください。

マークリーダーを用いた

# 「学生による授業改善アンケート」

## 集計システム操作説明会を開催！

FD委員会では平成17年6月20日(月)～24日(金)の5日間、マークカードを用いた「学生による授業改善アンケート」集計システムの操作説明会を開催しました。この集計システムは、全学一斉に行われる「学生による授業評価アンケート」とは異なり、先生方が①学生の反応を確かめたいとき、②授業の評価を知りたいとき、③学生の授業に対する理解度を確認したいときなどに、タイムリーにかつ自由に利用できるものです。旧システムは平成15年度後期から業者を介して導入しておりましたが、諸々の事情により、この度、FD委員会「学生による授業評価アンケートチーム」により製作されました。

新システムは、全学生のデータとマッチングさせることにより5月中旬頃から使用が可能になりました。しかも科目の増減や変更にも容易に対応が可能になるなどフレキシビリティの面を中心に、学内開発ならではの工夫が盛り込まれた作りとなっています。

操作説明会においてアンケートを実施「みなさん、どのように使っていますか？また、使う予定ですか？」

アンケートは操作説明会にご参加いただいた先生方にお答えいただきました。今まで、どれくらいの方々が、どのように使われているかを把握する機会として、はじめて実施させていただきました。アンケートにお答えいただきました先生方、誠にありがとうございました。アンケートの集計結果をお知らせいたします。現在使われていない先生方にもご参考にしていただけたと思いますので、試してみたいかと思いますがどうか。



果をお知らせいたします。現在使われていない先生方にもご参考にしていただけたと思いますので、試してみたいかと思いますがどうか。

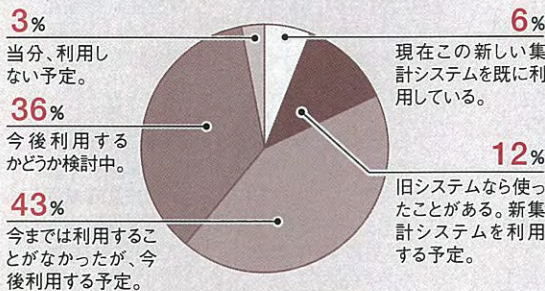
参加者に伺いました  
「私はこんなふうに使っています」

教職センター 平山 勉 助教授

私の場合、多くの授業でマシンを活用しての演習作業があります。そして、授業での演習課題と本人の感想をフォルダ転送させるのですが、その転送作業そのものをうまくできていない学生がいた場合、私の授業では欠席扱いおよび課題の未提出の扱いになつてしまつたので、それに対する対策として、マシン操作演習を行う授業については、終盤(13・14回目頃)に、課題の提出状況の自己申告(回数、自己評価)ということ及び授業方法そのものについての質問を行い、改善をしていくことを考えています。

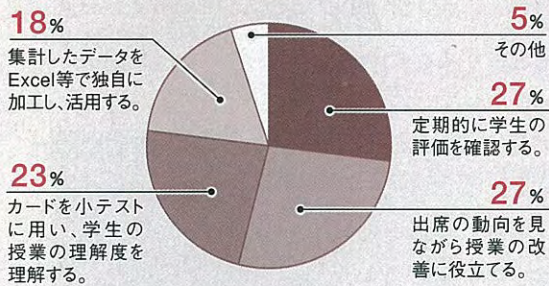
Q.

マークリーダーを用いたアンケートを使ったことがありますか？  
または、使う予定はありますか？



Q.

マークリーダーを用いた集計システムはどのような目的で使っていますか？  
または、使う予定ですか？



## 時の語り部 Vol.3 「今年度を振り返って」

MEIJO UNIVERSITY

今年度のFD活動には、各チームとも座長さんと委員の先生方の今日までの経験の豊さとセンスにより、これまで以上の意気込みを感じました。その勢いで、支援している大学教育開発センターの3名の担当者にはかなり充実(重圧?)した1年間をあと数ヶ月で終えようとしております。

今年度のトピックスは、本学では初めての学生が参加したFD意見交換会の設置であり、学生からみたアンケート項目の作成と各学部学科における満足度調査の実施ができたことです。この結果は、『速報版』と『詳細版』に分け発刊します。

FD委員会活動の際にはFD委員をはじめ、各先生方と、学生の皆様にご理解とご協力をいただきましたこと、この紙面をお借りしお礼申し上げます。

大学教育開発センター 内藤 孝行

### 「FD NEWS Vol.5」発行に関わったFD委員会メンバー

〔授業参観・公開授業チーム〕

西田 幹夫(座長)、藤田 衆、堀川 新吾、市原 茂幸、小池 聡、上村 克義

〔学生による授業評価アンケートチーム〕

成塚 重弥(座長)、谷江 武士、松原 慶子、岡本 浩一、奥村 公和、伊深 智美

名城大学FD委員会広報誌 — Vol.5

## Meijo FD NEWS

発行日 平成18年2月24日

発行者 名城大学 大学教育開発センター

〒468-8502 名古屋市中区白鳥1-501 TEL. (052) 838-2033 (ダイヤルイン)

ホームページ <http://www.meijo-u.ac.jp/> Eメール [edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp](mailto:edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp)

編集協力 (株) 進研アド 中部支社



この印刷物は、古紙配合率100%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しております。